

津波で内戦が終わった

二〇〇四年二月二六日、スマトラ島沖でマグニチュード九・一の地震が発生した。大津波がインド洋沿岸諸国を襲い、一四か国で二二万人に上る犠牲者を出した。なかでもインドネシアのアチェ州は、死者・行方不明者が一七万三〇〇〇人に及ぶ大きな被害を受けた。

アチェでは一九七〇年代からインドネシアからの分離独立を掲げる独立派ゲリラとインドネシア国軍の間で内戦が続いていた。津波が襲ったのは、政府がアチェ州に戒厳令を敷いて独立派ゲリラの掃討作戦を展開し、内戦の緊張が最高潮に達していた状況下だった。



上) 学生デモ隊を排除するためにバンダアチェ市内に展開する治安当局 (1999年3月)。
中) 紛争が激化する中、放火により焼失した商店街。火をつけたのが誰なのかは明らかになっていない (1999年6月)。

下) 津波でアチェ州の州都バンダアチェ市は市街地の三分の一が全壊し、人口の五分の一を失った。



国際支援の「実験場」となったアチエ

アチエの津波被災地支援のため、世界五四か国の五〇〇を超える団体から二万人以上の支援者がアチエを訪れた。規模や目的が異なるさまざまな支援者の活動を調整するため、被災地の中心であるバンドアチエ市に大統領直属のアチエ・ニアス復興再建庁（BRR）が設置され、国外からの支援者たちは、国内外各地からアチエを訪れた約二万人のボランティアとともに、復興再建庁の調整のもとで緊急支援や住宅再建、生業回復などの支援活動を行った。



支援団体ごとにデザインが異なる復興住宅。モスク（中央後方）や津波避難棟（左奥）も見える。

支援者たちはそれぞれの社会で最先端である考え方や物資を持ち込んだ。支援団体ごとにデザインが異なる復興住宅、平等性や透明性を重視した生業支援プログラム、最先端の技術や知識を利用した防災教育や避難訓練といった多彩な支援事業が展開するさまは、さながら復興支援の見本市の様相を呈していた。

右）住民はグループをつくり支援を受けた（第3章参照）。

下）仮設住宅の一角に整理整頓された食用油、ビタミン剤、食器、調理器具などの支援物資。よく見るとそれぞれの支援団体のロゴが付されている。



弔いのなかに生きる

物質面や制度面を中心とする社会全体の復興が進んでいく一方で、亡くなった人々をどう弔うかを含め、心や暮らしの復興は一人一人異なって進んでいく。社会全体の復興と個人の復興のあいだに生じるずれに一人一人が折り合いをつけ、残された者として生を歩もうとしている。



上) 集団埋葬地で津波により生き別れた子に祈りを捧げる女性。

右) 約1万5000人が埋葬されたムラクサ集団埋葬地。墓標はなく、埋葬場所には立ち入りが禁じられている。人々は脇の通路に座ってそれぞれの祈りを捧げている（第5章参照）。



右) 津波で内陸に運ばれた発電船とその周囲の土地を利用して開設された津波教育公園（第7章参照）。

下) 遺体の回収作業を行ったインドネシア赤十字が保管している住民登録証。遺体の多くは家族と対面しないまま集団埋葬地に埋葬された。遺族は住民登録証だけ回収され、本人はどこかで生き延びている可能性に一縷の望みをかけ、住民登録証の写真を切り取り尋ね人欄に広告を出した（第1章、第5章参照）。



また、社会として被災と復興の経験を受け止め、それを人類社会全体の経験として世界のほかの地域の人々や次世代に伝えるため、バンドアチェの街全体を津波災害の追悼の中心地にするとともに、津波災害の研究と教育の発信地にしようとする取り組みが進められている。



衣食住と教育——女性たちの復興

世界各地から訪れる支援者をもてなし、被災者たちを日々の活動に向かわせる原動力となったのは、自身も被災者であるアチエの女性たちの日常の営みだった。

インドネシアでの会議に欠かせないお茶菓子を用意し、津波後に増えた会議に味を添えた。被災後にいち早く幼稚園をつくって子どもたちの教育とトラウマケアを担い、小中学校では防災教育を支えた。色とりどりのヘルメットでバイクに跨り、避難所、市場、学校、役場と各所を飛び回る女たちは組織を越えて人々を結びつけた（第4章・第9章参照）。



八百屋。毎日の買い物場は情報交換の場でもある



協力してお茶菓子を準備する

右) 会議の受付ではにっこり微笑んで資料とお茶菓子を渡すおもてなし

下) 同僚を失い、自身も被災しながら子どもの教育に取り組む教員たち

